

探究学習におけるコミュニケーションの意義

○戸田啓^A，村上忠幸^B，中野英之^B，広木正紀^C

TODA Kei, MURAKAMI Tadayuki, NAKANO Hideyuki, HIROKI Masanori

京都教育大学大学院生^A，京都教育大学^B，前京都教育大学^C

【キーワード】コミュニケーション 探究学習

1. はじめに

“理科”というひとつの教科においても、「好き、得意、楽しい」と感じ、積極的に取り組む姿勢を持つ人と「嫌い、苦手、楽しくない」と感じ、取り組みが消極的になる人がいる。このような理科に対する姿勢を念頭において、私が課題として考えたいのは、次のようなことである。

「理科に対して好意的な思いを抱き、知識をたくさん持っていて、積極的に取り組む姿勢を持っている人だけが理科に取り組めばよいのか?」「理科に対して好意的な思いを抱けない人に、その気持ちを共有してもらうことはできないのか?」—このような観点をもとに、理科における健全なコミュニケーションの形を探り、検討してきた。

2. 課題解決のための方法論

教育現場においては苦手であったり、興味がなくても“理科”に取り組まなければならないことがある。探究学習を行う場において、自分たちの力で何かを発見していく過程は魅力的ではあるが、「知識がない」「苦手意識がある」「興味がない」などの消極的な理由を持つ人ばかりが、自らの力だけで取り組み、解決していくことは、様々な意味で障害が生じると考えられる。

そこで、自分の苦手なことを得意な人と、また、自分の嫌いなことを好きな人と協力して、一緒に活動していくということを提案する。その際、常に、それぞれが自分の考えや思いを出し合い、自分なりに相手のことを受け入れながら、相互の自己肯定感を高めあうような健全な“コミュニケーション”が必要であろう。なぜなら、未知のことを解決していくまでには、

様々な視点から見えてくる事実や考えをつなぎ合わせていくことが必要になってくるからである。また今回は、このようなコミュニケーションを結ぶ中に、支援者がアドバイスをするという状況を設定し、その効果について検討した。

3. コミュニケーションの効果

課題として「どうして扇風機の羽根はそのような汚れ方なのか」という疑問を設定し、その解明に向けてコミュニケーションを意識した探究活動を行った。

○ 問いかけ：その現象が起こる原因について
○ コミュニケーションの形態（一人称—二人称—三人称）：① 1人で考える→② 数人で意見交換をしながら考える→③ 発表会をしながら考える。また、①～③の前後で各個人がこの現象に対して A) どの程度難しいと思っているか、B) どれほど解決したいと思っているかと、支援者がグループの活動に介入することについてどう思ったかを記述させた（対象：大学生13名）。

○ 支援者の介入について：介入がある場合、以下のような特徴が見られた。

- ・発問によってより考えが深まった。
- ・具体的な実験が浮かんた。
- ・ほとんど意識しなかった。影響されなかった。

対象グループの議論の進み方にもよるが、支援者のアドバイスによって考えを深めることができたり、具体的な実験を行えたりしたことは、その人の意欲を継続させ、解決のための状況となる傾向が窺えた。